

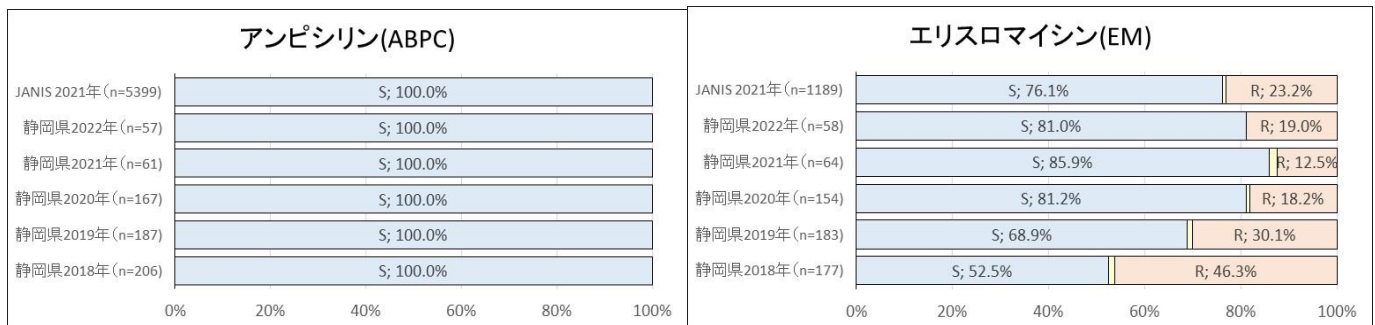
静岡県のアンチバイオグラムを利用した経口抗菌薬の選択(成人)

静岡薬剤耐性菌制御チーム

細菌感染症治療においては、COVID-19 の影響で気道からの検体をとることが、難しい状況ですので、empiric therapy が多くなっています。どうしても広域抗菌薬を選択したくなるのですが、感染症診療では、感染臓器を特定し、起因微生物を推定することが必要です<sup>1)</sup>。推定した起因微生物を十分カバーする抗菌薬を選択しますが、薬剤感受性が明らかになった場合には可能な限り狭域化を図ります。

今回、静岡県各地域の代表的な菌種に対するアンチバイオグラムのデータが更新されました<sup>2)</sup>。2022年1~3月、静岡県内43施設、32,122菌株の薬剤感受性が解析されています。外来診療で頻度の高い疾患について2022年の資料を基に、成人における経口薬で治療可能な代表的抗菌薬治療を考えてみました。

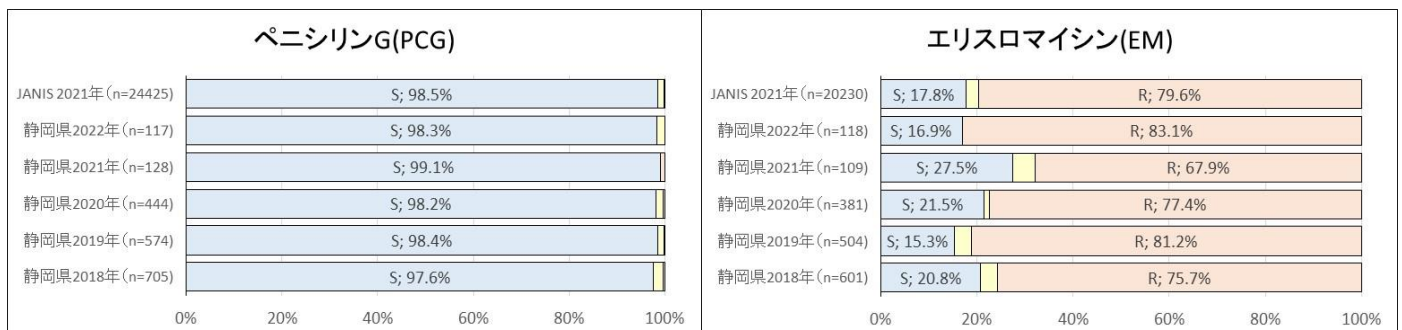
1. Streptococcus pyogenes (溶連菌)



JANIS: Japan Nosocomial Infections Surveillance 厚生労働省院内感染対策サーベイランス事業

小児に多い急性咽頭炎・扁桃炎の起因菌ですが、成人でも散見します。ペニシリン感受性が100%ですので第1選択となります。経口ベンジルペニシリンが入手しにくい場合、バイオアベイラビリティが90%と高いアモキシシリン (AMPC) を使用します。広域のアモキシシリン・クラブラン酸配合 (CVA/AMPC) を使用する必要はありません。ペニシリンアレルギーの場合には、エリスロマイシン (EM)、克林ダマイシン (CLDM) を考慮します。EMの感受性は、県全体でも85.9%と感受性は保たれていますが、マクロライドを温存するため、第1選択にはしないことが大切です。

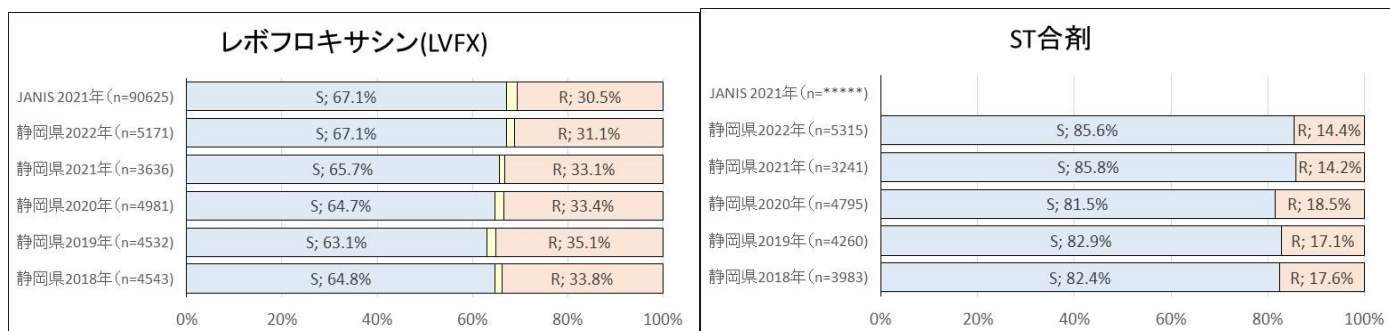
2. Streptococcus pneumoniae (肺炎球菌)



成人の市中細菌性肺炎で最も多い起因菌です。喀痰グラム染色では確認しやすい細菌ですが、自己融解を起こすことがあり、外注検査では培養されないこともあります。髄液以外ではペニシリンに十分な感受性があり、軽症肺炎ではAMPCの経口投与で治療が可能です。EMの感受性は昨年まで経年的に改善傾向でしたが、今回は27.5%から16.9%とかなり低下しています。マクロライドを代替薬としては選

扱できないのはもちろんですが、インフルエンザ菌のクラリスロマイシン(CAM)感受性率も 84.6%から 69.3%と低下に転じました。AMR 臨床リファレンスセンターのデータからもわかるように静岡県は全国的なかでマクロライド系使用量は多い地域です<sup>3)</sup>。マクロライドを使用する際には、起因菌、感受性を考慮し、乱用を避けることが大切と思われます。尚、溶連菌や肺炎球菌についてはここ数年 COVID-19 の影響もあり、検体数が減ってきていますので、感受性率に影響が出ている可能性もあります。

### 3. *Escherichia coli* (大腸菌)



市中の尿路感染では最も多い起因菌です。尿のグラム染色では、他の腸内細菌との鑑別は難しく、培養結果の確認が必要です。ST 合剤は十分な感受性があります。レボフロキサシン(LVFX)については全国データと同様、第1選択にできない状況です。セファクロル(CCL)については県全体で77.7%と十分な感受性を持つとは言えませんが、単純性膀胱炎では、第1世代セフェム系抗菌薬の十分量を7日間使用することで治療は可能です。

病院では、細菌検査室から定期的にアンチバイオグラムが更新されていると思います。診療所では、経験的に抗菌薬の効果は感じられていると思いますが、こうした客観的なデータを合わせることで、より適切な抗菌薬選択ができるものと思います。

全体の資料は静岡県庁ホームページ<sup>2)</sup>で、県内アンチバイオグラム(資料1 菌種別, 2 地域別, 3 経年変化)と外来での抗菌薬適正使用手引き(成人版)第4版としてご参照いただけます。ご活用をいただければと思います。

1) 青木 眞:レジデントのための感染症診療マニュアル 第4版 医学書院 2020

2) <https://www.pref.shizuoka.jp/kenkofukushi/shippeikansensho/kansensho/1003065/1024250.html>

3) [https://amrcrc.ncgm.go.jp/surveillance/010/ref/NDB\\_2013-2020\\_pref.pdf](https://amrcrc.ncgm.go.jp/surveillance/010/ref/NDB_2013-2020_pref.pdf)